

それは将にクリントン大統領の女性問題に似ている。私は好意をもって言うのであるが大統領になるまえから女性問題はあり、本人自身が既に手を焼いていたにも関わらず、執務室で再び同じことを繰り返すと言うことはどういう意味をもっているのか。中村順子はケネディ大統領の「刷り込み」ではないかと言う。だとすれば内臓の捻転からクシャミするようなもので確かに今回の大問題で懲りているだろうが、親についていく雁の雛を引き離すと雛はしんでしまうしかない。その習性を知っていたら簡単にはスキャンダルにならなかったと私は思う。病気は気づいて治療するのとししないのとでは大きな差がある。然し彼が大統領でなかったら問題にはならなかっただろう。大統領は選挙という困難な公認を通して獲得されたものである。個人と大統領とは相当の開きがある。だが大統領という権限はクリントンという個人が行使する。肉体、精神の集積である個人は任命された期間は象徴の大統領と同格になり得る。ここで私が言いたいことは画家にあてはめた場合はどうなるかと言うことである。作品とは画家が造り出したものである。しかし作品と作者は同一ではない。作品は商品化されれば作品のみで独立したものとなる。画家は生物としてそのまま作品と思うことは出来ても一枚の作品もない画家はありえない。作品は作品のみで評価すべきで作者である画家は必要ないと、言うこともできる。このことは小説についても言えるかも知れないが、活字と文章としての小説のあいだには何の関係も無い。

美しい白鳥を日本で眺める限り産卵して雛を育てる白鳥を見ることはできない。産卵地はシベリアで越冬は日本であるから、美しい白鳥をいくら丁寧に観察しても渡りの習性は見えない。しかし、生体、精神、本能、生態、習性すべてを知りたい時、一枚の白鳥の絵では限度があるのは、また当然である。一枚の絵を前に翠と丹の不思議な疑問が吹っ切れないとき、翠と丹をどうして使ったのか画家に質問したくなる。普通、画家は懸命に答える。人間は、白鳥は遺伝因子に組み込まれた本能によって日常、平凡に行動しているにすぎないものだ、といわれている。確かに画家は絵を描いたに違いないが、そうして質問者が喜ぶように芸術的に説明できるが、真の実体とは何ら関係ないのかもしれない。絵と画家の真の意味を知るためにはローレンツ、ファーブル的手法を用いなければならないのではないだろうか。作品は画家が飛翔した痕跡なのかも知れない。或いは生理現象としての大便だと言う説もあるが、絵は明らかに視覚的だと断定できるのだが、不思議なのは眼球という器官が必要なのであり、見るということは目を意識しないことであり、目は自分自身の目を直接みることはできないと言うことに還元される。そして眼球は色々の生物が持っているが画家の場合「人間」の眼球となる。